

## ● なぜ西淀川で大気汚染がおこったのか ●

大気汚染とは、工場の煙や自動車の排気ガスにふくまれる有害物質などによって、空気が汚れることを言います。1960年代、西淀川区の大気汚染は大阪市でもっともひどいと言われていました。

西淀川区には、中小工場がたくさん集まっているため、これらの工場から出される「硫酸化物」や「ばいじん（ものを燃やしたときに飛び散る小さなゴミ）」が空気の中に広がっていきました。これらの汚染が、西淀川に住む人たちに、ぜん息などの深刻な健康被害を引き起こしました。

風が弱い日は汚れた空気がそこにたまったままで、風が強い日は、此花区・大正区や尼崎市などの大工場からも汚れた空気が西淀川区に集まりました。

ひどい日には、昼間も車のライトや、街灯をつける状態でした。アサガオが1日でかれてしまったこともありました。

さらに、大阪と神戸の間に位置する西淀川には、阪神地区をつなぐ国道や高速道路が建設されました。

工場から出される排煙と、大型ディーゼル車などの排気ガスが合わさって、さらに有害な物質になるため、西淀川の公害は「複合大気汚染」といわれました。

